

3.2. インドとアジャンタ、エリョーラ（2000年2月）

国連に職を得ての大きな楽しみは「旅」である。特に、公務出張の折を利用して歴史的な文化遺跡を訪ねる機会が持てると新鮮な自分が生まれるように感ずる。二年前、初のエジプト出張でナイル河を上空から見下ろした時の情景は今も忘れない。「水」に関わる業務だったから、「ナイル沿いにのみ緑が有り、人が住み文化が育つ」と新鮮な印象に打たれた。地上でスフィンクスやピラミッドを訪ねたのは勿論である。

2000年2月、ムンバイ（旧ボンベイ）で会議があった。公務の一部として「原子力海水淡水化プラント」建築サイトをチェンナイ（旧マドラス）南郊を訪ねた際に、その道すがらマハバリプラムで「その昔、あの三蔵法師が歩いた道」に沿っての遺跡で短時間過ごすことができ感動した。ここではヒンズーの神の石造を求めた。が、それ以上に公務のあとの週末に訪れたアジャンタとエリョーラの印象が強烈だった。アジャンタ、エリョーラはムンバイの北、飛行機で約二時間の地である。幸い、仕事の相手の一人が案内役を買ってくれて、金曜午後会議の仲間と別れアウランガバートに飛んだ。喧燥と埃のムンバイに比べて静かで清んだ雰囲気が良い。気温も20度余りで猛暑のムンバイより快適である。

翌土曜、車で二時間アジャンタに向かう。ここも「その昔、あの三蔵法師が歩いた道」である。この石窟に仏教壁画や彫像が保存されている。素晴らしいの一語だった。紀元前二世紀から後七世紀にかけて作られたあと、なぜ急に放棄されたかは今も謎だそうである。十九世紀始めイギリス人のハンターが岩の隙間に姿を消した小鳥を見て「岩の中に何かがある」と直感したのがきっかけで歴史的な発掘につながったそうである。



アジャンタには約三十の石窟がある。小高い丘の上から見下ろすと岩肌に石窟が続いている。そのうち約十の石窟に素晴らしい壁画や彫像がある。長い間埋もれていたおかげで保存度が良い。私は彫像、特に修行中の菩薩像が好きである。前年訪れた敦煌千佛洞の弥勒菩薩がまた臉に浮かんだ。そこでの五時間を夢中で過ごした。同行してくれた相手は二時間程度の見物を予定していたようだがそれでは絶対的に不足だった。どの石窟も立ち去り難かった。壁画保護のため、写真撮影が禁じられているのが残念だった。絵葉書も良いものがなかった。代わりに写真本を買うことにした。絵の好きな家内が一緒だったらきっと感動するだろうに、と思った。

日曜には三十分離れた西のエリョーラを訪ねた。ここは仏教だけではなくヒンズー教やジャイナ教の彫像が石窟に保存されている。六世紀から十三世紀にかけて、先ず仏教、次いでヒンズー教、ジャイナ教の石窟が彫られている。多くの仏教画家や彫り師がアジャンタからここに移ったとの見方があるようだ。現在エリョーラには彫像しかないが以前は壁画もあったと聞く。エリョーラはアジャンタと異なり、地中に埋もれることがなかったため、長い年月の間に狩猟民や野宿者の巣として使われて損傷を受けたらしい。石窟内の壁や天井は煤けており、石窟の奥まった所や高い天井の一部にだけ壁画の残像が見えた。

約30ある石窟の圧巻は十六窟だった。八、九世紀の作と言われ、ヒマラヤにあると言われる最高神シヴァの架空の宮殿を形にしたものとされている。横六十メートル、奥行き九十メートル、高さ三十メートルの宮殿が一枚岩から彫られている。百五十年間、七世代に渡って鑿とハンマーのみで彫ったと聞いて信じられるだろうか。設計図も写真もコンピューターもモデルもないのである。想像力だけでこんな物が彫れるのだろうか。驚嘆に息を呑んだ。



インドに飛ぶ前は釈迦誕生地やインダス河も訪ねたかった。もちろんインダス河は四大文明発祥地の一つである。が、釈迦誕生地はムンバイから遠く、インダス河は今はパキスタン領内でともに実現できなかった。いずれにしろ、それに近い文化や風景を眼にしたことで満足することにした。

それより以前に古代文明の揺籃地、黄河沿いの中国を訪ねていた。西北部の敦煌も訪れる機会に恵まれて美しい仏教壁画や彫像に感銘を受けていた。エジプトの古代遺跡も訪ねていたから、これで四大文明発祥地の三つを訪ねたことになる。四つ目のメソポタミアは現代のシリアにあるチグリス、ユーフラテス河流域である。今のところそこを訪れる機会はないが、公務が利用できる機会がなければ私的にでも訪ねたいと目論んでいる。三年後の日本帰国までには実現したいものと思っている。